

IAEA 主催「原子力エネルギー Management 研修(第1回)」に参加して

H22.12.10 日本原子力産業協会 国際部 小西俊雄

IAEA 要請を受けてその準備最終段階の詰め作業支援とコース期間中の現地運営支援(メンター役兼務)に携わる機会を得た。コース全体の状況など、感想(以下斜字体で示す)を交えて関係者の参考に供したい。



【背景】

IAEA では、原子力発電新規導入国(Newcomers)を中心にこれからの政策立案に携わるであろう Young Professionals を対象に Nuclear Management School を今年立ち上げた。この School は IAEA 各部署が協力して実施する横断的な内容だが、原子エネルギー局知識管理ユニットが事務局になって企画運営した。同局原子力発電部の前部長尾本氏が在任中に計画着手したもので今年がその第1回である。

研修内容、その進め方も「世界原子力大学 WNU の夏季研修」と類似点が多い。「世界原子力大学」は IAEA が OECD/NEA、WANO、WNA と共同で運営する「次代の原子力指導者育成プロジェクト」である。夏の6週間、約100人の若手 Professional が集まって集中訓練を受ける。その概要、過去数年の研修プログラム、参加者自身の感想などを、を原産協会ホームページ「WNU 夏季研修の紹介」で紹介している。「[WNU 夏季研修の紹介 \(http://www.jaif.or.jp/ja/wnu_si_intro/index.html\)](http://www.jaif.or.jp/ja/wnu_si_intro/index.html)」

IAEA 学校が WNU と違う大きな点は、参加者の多くが経験の浅い若者であり、IAEA のリソースに限定して講師・教材を選定していること。この得失は一概に言えないが、日本からの参加を考えると原子力世界の動き全体を概観する意味で実務経験の少ない若年層向けにはこちらが適しているようだ。

期間は11月8日—26日の3週間、イタリア Trieste の国際理論物理センター ICTP で開催された。コース自体も ICTP との共催である。

ICTP は「途上国の科学者養成支援」を目的にした機関。だが、「先進国若手」も受け入れる。滞在費も原則 ICTP が支給する(コース参加費自体は無料)。ただ、「1国1人」が原則らしい。IAEA の技術協力(TC)資金も一部活用される。自費参加も可能で、WNU に比べてかなり低費用で済む。期間が3週間と言う点もあって、日本の大学院生や入社間もない若者には参加し易いかも知れない。



参加者は Newcomer Countries からを中心に約40名弱(30国弱)。多くが「1国1人」。業態別でみると「官5学2研3民1弱」で民間色が薄い。途上国では国主導で計画が始まるからであって、民営化は先のことであることを示している。原子力先進国と言えるのは日米口程度。他にアルゼンチンなど。他はベトナムなど途上国。講師は原則 IAEA のスタッフ(または OB)である。

WNU は今夏の場合、参加者は99名(30ヶ国・地域)。OECD 加盟国を原子力先進国と見なせば、7割を占める。業界別では、産業界が約6割強を占める。

来年は「8月開催、参加募集2-3月頃」と事務局は計画している。今年は [ICTP ウェブ](#) で募集を受け付けたが、来年は IAEA ウェブでも案内が出るのではないかな。

【研修内容】

気候変動、原子力の役割、原子力発電計画立ち上げの準備、インフラ整備から安全、核セキュリティ、保障措置、国際法関係、人材計画と広範である。その中で、IAEA 支援業務、実施業務の紹介、情報リソース紹介と、これからの業務に役立ててもらおうように組まれている。

今年のカリキュラム、教材(pdf)は [IAEA ホームページ NKM](#) からダウンロードできる。また、講義の様子は Video 化され、これも同ページで閲覧できる。

[NKM ホームページ](#)



研修形態は講義・演習・仲間同士での議論・発表とある。最後に「テスト」がある。講義後の復習の機会と集中心維持が狙いである。それなりに効果がある。

WNU に似ているが、やや講義が多いか。今年が第1回でもあって、参加者の評価を見て重みに変化が出てくるのではないかな。テストは WNU にはない。今年はやや問題が易すぎたかもしれない。

【所感】

私が今回参加の機会を得たのは IAEA の OB で(かつ WNU の経験の)あることが背景にある。そのことを考えると、来年以降もメンターとして参加する人は限られる。継続的に状況を把握できないかもしれないが、今年の実況等は WNU 参加検討者にも参考になると思う。

東南アジアからの参加者を迎えて Regional School として日本で開催することも可能かもしれない。韓国に先行を許している感の最近の対外関係で、早めに実現に動けば可能性はあるように思う。

今後毎年開催の予定と聞いている。来年以降の改善点を私なりに幾つか提案し、IAEA に残して来た。

- 講義が午後にもあり、かなり負荷が大きい。事例検討など実務的な演習を増やしたい。
- 若者同士で特定の課題を調査検討するタスク(“Project”、WNU では Forum Issue と称する)には、常時意見交換できるメンターのいることが望ましい。今年はそれがなく、時間効率が悪かった。
- 3週間の期間は適当であるが、施設見学の1度は平日に計画したい。週末の施設は閑散としていて活気に乏しい。2週とも土曜が拘束されるのは若者に酷ではないか。
- 「講師・メンターを IAEA スタッフ(含 OB/OG)に限定」は原則なら仕方がないが、広く集めて3週間常駐者を4-5人は配置すべき。
- 「参加」には所属機関の理解・後押しが望ましい。「個人参加」は責任と使命感を薄めかねない。研修後のフォローアップ体制も制度化すべきではないか。
- 開催時期は少し早めたい。8月はツアーリストで混むので10月が好ましいのではないかな。
- その他、初回としての気付き点は積極的に改善に結び付けて欲しい。「いずれ」では遅すぎる。(完)

